

この時期になると、幼稚園の園児たちが三十年来、市内のJRの駅にクリスマスツリーの飾り付けをする。クリスマスといえば、いろいろなイメージがあるだろう。ツリー、サンタクロース、クリスマスケーキにクリスマスプレゼント。リースやキャンドル。これらのイメージはキリスト教国ではない日本にも十分定着してきた▼これらのイメージはシンボル。それぞれに意味がある。これらのシンボルに共通しているテーマは「愛」である。クリスマスと「愛」

外刊新聞  
04.12.05

## 地の塩

も、どうやら結び付いてきたようだ。クリスマスが、好きな人と過ごしたり、愛の告白の日であったりする。それも本来の意味と遠いものではない

のだが…▼こととしては駅のクリスマスツリーの根元に小さな馬小屋を飾った。マリアは生まれたばかりのイエスを「布にくるんで飼う葉桶(おけ)に

寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから」(ルカ2・7)。十三世紀、イタリアの聖人、アシジのフランシスコは、聖書に記されているイエス・キリストの誕生の場面を再現しようとし、グレッチョで馬小屋を飾り、村人たちとクリスマスを祝った。以来、クリスマスが近づくと、この馬小屋でのイエスの誕生を表した人形が教会や信者の家庭に飾られるようになった▼キリストの誕生を祝うクリスマスで最も大切なシンボルは「飼う葉桶に寝かされたイエスだ」と思う。なぜならそこにこそ「神の愛」が示されているから。貧しい家畜小屋で生まれたイエス。家畜の餌を入れる箱に置かれたイエス。これは、貧しさの中に神が生まれたことを表している。この子は成長して貧しい人の中に入っていく、その人たちと共に神がいてることを説いた。生涯の終わりには自分を食べ物として与え、十字架の上で死ぬ。「貧しい人」とは、実は私たちのこと。馬小屋の飾りがこの国にも定着すれば、うれしいのだが…。(Y)